



ブツダ本がずらりと並んだ書店のブツダフェア(東京都中央区)

今 静かに

数千年に一人の大天才!!

ブツダがブーム!!

仏教ではなく人間ブツダが震災後の日本の闇を照らす!

東日本大震災以降、不安な日々が続く日本で、ブツダが静かなブームとなっている。日本人得意の「困った時の神頼み」かといえば、ちよつと様相が違う。宗教としての仏教ではなくて、人間ブツダに注目が集まりつつあるのだ。ブツダの教えは、震災後の日本に教いをもたらすのだろうか。

ライター 柴田恵理

東京・新宿の高層ビルのある一室。午後8時半を過ぎていたのに、熱気に満ちあふれていた。

スリランカ出身の僧侶、アルボムッレ・スマナサーラ長老の流暢な日本語に、会社帰りのサラリーマンや

家事を終えた主婦らが熱心に聴き入り、メモを取る。

40〜50歳代が中心。朝日カルチャーセンター新宿教室で一番人気のこの講座は、「初期仏教入門―お釈迦様の根本の教え」である。

スマナサーラ氏の講座は毎回130人の定員がすぐ埋まり、キャンセル待ちが出るほど。それでも「立ち見でもいいから」と、訪れる人は後を絶たない。

なぜスリランカの僧侶の話に、これほど人気があるのだろうか。スマナサーラ氏はスリランカ上座部仏教の長老であり、1980年に来日、初期仏教の伝道と瞑想指導を続けてきた。「怒らないこと」(サンガ新書)

といったベストセラーをはじめ100冊以上の著書があり、発行部数の累計は100万部を超える。

同じ仏教でも、日本とスリランカでは違っている。インドでブツダが興した仏教のうち大乗仏教として発展したものが、中国を経て日本に伝わった。大乗仏教には経典が膨大にある。ブツダ以降の僧侶が「ブツダはこう考えたはずだ」と解説した内容を次々に経典にしたため、大乗仏教ではそれが許されていた。

一方、スリランカの仏教は上座部仏教と呼ばれ、大

ブツダの言葉

「死があるように、生がある。生があるように、死がある」。このことを知る者は、自らの肉体に対する欲望を捨て、他者に対する欲望をも捨て去る(スワタナパーク・二二三)

肉体に関して人間のあいだに個別の差異は存在せず、あるのは、名称による差異だけだ(同六百十二)

いかなる不幸が生じたとしても、それはすべて意識の働きによる。意識の働きが停止するならば、不幸など生じない(同七百三十四)

〔仏教用語〕オリジナル(新田哲巳編著)から



乗仏教と違い、初期の經典、原始仏典を重んじる。この仏典にしても、ブッダ本人が書いたわけではないが、早い時期に弟子たちがブッダの教えをまとめたもので

ブッダがわかる本

書名	著者	出版社	本体価格
怒らないこと 設立つ初階仏教法話1	アムボム・レスマナリー	サンガ新聞	700円
地獄 ブッダの言葉	小池龍之介	ディスカヴァー・トゥエンティ	1700円
「いいこと」が「いい」起こるブッダの言葉	橋西勝	王様文庫	552円
手塚治虫の「ブッダ」読本	潮出版社編	潮出版社	1200円
ブッダはなぜ教が立たないの	島田裕巳	武蔵ウツダム・ワズワハ	950円
ブッダは、なぜ子を捨てたか	山所智雄	集英社新書	680円
ブッダのことは スッタニパータ	中村元	岩波文庫	940円
ブッダの真理のことは 徳興のことは	中村元	岩波文庫	900円
原始仏典	中村元	ちくま学芸文庫	1300円
法句経講義	友松賢治	講談社学術文庫	1200円

あり、直接的にブッダの思想が伝わってくる。スマナサーラ氏はこう言い切る。「ブッダの教えには、現代を生きる人たちがどうすればいいかという答えが、すでにちゃんとあるのです。私はそれを、現代社会のコンセプトで語っているにすぎない。困ったことがあれば、ブッダはこう答えて、解決してあげますよと教えて、解決してあげる。一方で日本の仏教は宗教になってしまっています。宗教は誰に対しても、信じなさい、念仏を唱えなさいでしょう。それでは解決にならない。ブッダの教えは宗教ではないんです」

仏教は宗教だと思ひ込んであるわれわれは、長老の「ブッダの教えは宗教ではない」という言葉に戸惑ってしまいが、同じような考えを持つ日本の僧侶もいる。20万部を超えるベストセラー「超訳ブッダの言葉」(デイスカヴァー・トゥエンティワン)の著者、小池龍之介氏だ。

東大教養学部でドイツ哲学を専攻したという異色の僧侶。実家の浄土真宗の寺を継いだ。小池氏は語る。「ブッダの教えというのは、実に実証的なんです。実際に検証できることを重んじていて、見えないものを信じて得ないものを信じるのは妄言だと言っている。ところが宗教には「証明できないものを信じる」というような、いかにわしい方向がある。日本仏教もそういう側面を持ってしまっている。これでは、科学的な精神を持つ現代人にフィットしません」

神、創造主でなく人間なのが魅力

「超訳ブッダの言葉」では、感情をコントロールできない現代人に対して、感情を制御する方法をブッダの言葉から拾い上げて説いた。極めて分析的でかつ実践的な本だ。だから多くの人に受け入れられ、売れ続けている。小池氏はこう続ける。

「日本ではずっとブッダそのものの教えよりも、李海、親鸞といった宗派を興した人の教えが重んじられてきた。でも数千年に一度の大天才と、数百年に一度の小天才、大秀才とは違いがあります」

紀伊國屋書店横浜店の佐々木里奈さんによれば、東日本大震災以降、売れる本の傾向がガラリと変わったという。それまで好調だった歴史雑学関連の売れ行きが止まり、代わりに心の癒やしになるようなスピリチュアルや宗教関連の本が売れるようになった。特に「これから何が起こるか」といった予言的内容の本と、ブッダがらみの本をセットで買う人が増えているとか。

「今まで宗教関連コーナーを訪れるのは大半が女性でしたが、震災後は男性が非常に増えました。現在、男女比は半々。男性は60歳前後の方が多いようです」と佐々木さんは言う。

「仏教」ブームは、なにも

今にはじまったものではない。2007年ごろからすでに兆候はあり、09年に開催された「興福寺創建1300年記念」(国宝 阿修羅展)は長蛇の列ができて話題になった。しかし、最近「仏教」というより、「ブッダ」なのだ。

仏教という宗教に対する意識と、ブッダに対する意識は明らかに違う。ブッダは王の息子として生まれ、「生老病死」の苦悩から解脱するために弟子を捨てて出家し、35歳の時、菩提樹の下で悟りを開いた。神や創造主ではなく、あくまで悟りを開いた人間、私たちと等身大の人としてとらえることができるのが魅力なのだ。

象徴的なのが著者を中心にこれまでに累計数百万部を売り上げた漫画「聖☆おにいさん」(中村元著、モーニングKC)の大ヒットだ。ブッダと神の子イエスが、バカンスを過ごすべく下界に降りてきたという設定。節約家のブッダと浪費家の

既存の仏教は時代おくれ。人々のニーズに
応えていない。だからこそブッダ

今、なぜブッダなのか？それは、日本の既存の仏教の力が弱まったことと表裏しだと思えます。今回の震災では、別せずして、人々が仏教に期待していないことが露見しました。

仏教界では「この非常時に、人々をなにより仏教の助けを望んでいるはずだ」と思っていた。ところが、いざふたを開けてみたら全く違った。人々にとっての仏教は葬式のための「道具」、つまり遺体を葬る際の「付属品」にすぎなかったのです。実際、被災地で住職以外の僧侶が供養をしようとしても、檀家の方はそれをあまり歓迎しなかった、という話も聞きました。

なぜ既存の仏教は弱体化したか。仏教を今やりのドラマ「カー」に当てはめてみるとわかりやすい。「大乗仏教」の教

師は、その組織維持のために、教団の対象となる「衆生」という顧客を創造しました。そして、各宗派とも複雑で深遠な教団システムをつくりあげ、すべての衆生の救済をアピールすることで潤い込んだ。お寺を建て、儀式をとりおこなうということがこれに当たります。

ところが、「顧客の創造」はしたものの、新しいニーズに対応する「イノベーション」はできていない。このため、時代に乗り遅れてしまい、昔のような力を発揮できなくなっています。

現代人は、お寺や儀式が自分たちを救ってくれるとは思っていない。震災後は特にそうです。むしろ自分が参加し、自身で考えたり、感じたりするなかで何かを得ようとしている。旧来の儀式中心の仏教



「神は、要らない」など宗教書がある著者の島田裕巳さん

市の40代女性は「少しでもブッダに近づきたい」と、眉毛の「アートメイク」を植えた。

「如意輪観音像のポストカードではなく、瞑想や座禅、ヨガなど、私が「スピリチュアル・ブディズム」と呼ぶものに関心が向いている。各人が自分の宗教やブチ悟り(気づき)を求めようになった時、にわかに入信「ブッダ」が身近に感じられるようになったのでしょう。

ブッダは一国の王子として豊かな生活を知ったがゆえに苦しんだ。私たちの生活も同じように豊かになってきた。つまり、ブッダの生活に近づいたことで、ブッダの言葉が心に響く。

結局、宗教の世界観より、「人間、いかに生きるか」について知りたいのです。だから人間「ブッダ」に注目が集まるのです。

ードを授け、無理やりオランダししました(笑)。世界中どこに行っても、ブッダの顔を見て不快に思う人はいませんよね。私も不快感を与えない人になりたいと思っていました」

そして、人間ブッダの魅力を改めて見つけたのが、故手塚治虫氏のベストセラー漫画「ブッダ」をアニメ化した「手塚治虫のブッダ―赤い砂漠よ！美しく―」だ。先日、3部作の第1弾が公開された。ブッダとなるシッタールタが王家に生まれ、出家を決定するまでを描いている。

映画を観た人からは「正直、もつと宗教色の強い映画かと思つたら、一人の青年の心の葛藤を描いた物語でとても感動した(40代男性)」「ブッダもひとり人間として、悟りを開くまで橋みに悩み抜いたのだというところがわかり、思わず涙が出た(30代女性)」という声があがった。

手塚氏は原作を描き終えた後、ブッダについてこう

語っている(1984年6月26日付の毎日新聞)。「ぼくには何よりも半直に言つてすごい哲学者だということですよ。いわゆる仏教の教えを説いた宗教的カリスマであるよりも、哲学者として偉大である。(中略)そもそも人間の生き方、人間愛を仏教ほど直截的に語りつくしているものはない。そこにごまかしがありません。しかも自然と人間、宇宙と人間、自分と他人、こうした天地のものすべて一休だど、全部を包み込んで、そしてつなげてしまうようなところがある。人間の哲学が小さく小さくなって行く中で、これは広大で、現代が必要としている思想ではないか。これを持たないでは二十世紀も二十一世紀もない。地球も人類も存在しないという気さえします」

手塚氏が語っているように、21世紀にも22世紀にも通用する哲学。震災後のわれわれが求めているのは、まさにそういうものなのかもしれない。